

Last Chorus[♪]

編集後記



左から森本絵美莉、中村早希、赤池すずか

◇走った先に未来を見つけた

「この学校ではアナウンサーになれないのですか」。入学して最初の「情報発信特講」の授業後、下川教授の研究室に走って行ったのを思い出す。必死に話を聞いた。「アナウンス技術だけでは通用しない。マルチな能力が必要だ」とアドバイスもらった。あの日から2年…。無我夢中で自分自身に挑戦し続け、駆け抜けてきた。取材や執筆、イベントの企画・運営といくつも取り組んできた。

府内五番街にある府内フォーク村「十三夜」は、私が初めて取材に行った場所だ。その後も数度にわたり、取材経験を重ねた。

経験しながら全てを学んでいった。あいさつやお礼の仕方、取材の方法、原稿の書き方…。先生に添削してもらい、「こんな書き方や表現があるんだな」と気づいた。

でも本当は、あのこと「十三夜」に取材に行くのが怖かった。毎回違うミュージシャン。何も分からない小娘が、音楽に命をかけている人たちを取材し、原稿を書く。「私でいいの」と何度思ったことか。私なりに体当たりでぶつかっていた気がする。

そんな時、あるミュージシャンに言われた言葉を思い出す。「君が感じたままに書いてくれればいいんだよ。だから、最後まで聞いてね」。その言葉と表情は忘れない。あの日、私は取材する意味を再認識した。

2年間の時は過ぎ、私の短大生活がこの一冊の冊子に詰まっている。いろいろあったなあ。微笑みが出る。「いつも発見や興味を持ってないと、生きてる意味ないよ」。先生が言った言葉。今ならその言葉の意味、なんだかわかる気がする。

私は今春、臼杵ケーブルネットに就職し、制作スタッフとして働く。情報伝達のマルチな世界へ飛び込むのだ。焦りはない。私には2年間で得た貴重な経験があるからだ。(森本絵美莉)

◇努力はウソをつかない

「君は編集者には向いてない」。下川教授の言葉が突き刺さる。雑誌の編集者を夢見て短大に入った。しかし「キャンパスカフェ」や「新聞雑誌制作演習」などで、取材・執筆を重ねる中、実は、自分でもそのことに薄々気づいていた。

昨年1月、教授から「Voice第2号」の編集長を任された。編集者になる夢をあきらめたが、こうした仕事を任されるだけの信頼と技量はある。そう思えるのがうれしかった。「地域活動フォーラム」の特集号だった。多くの学生に執筆を頼み、グラフィック担当の小坂さんと共に毎日広告の赤城さんのもとに、何度も足を運んだ。

外部の方と学生だけで話し合いをするのはとても緊張した。この経験は普通の学生には絶対にできないものだ。制作期間は1カ月半。その間、下川教授に怒られ、赤城さんにも迷惑をかけた。

自分自身のふがいなさに悔し涙が出ることもあった。それでも多くの人に支えてもらいながら、「Voice」を作り上げることができた。この作品は私にとって、かけがえのない宝物となった。

卒業研究で再び「Voice」編集長の一人になった。この冊子は私たちが2年間で学んだことの集大成だ。成長した私たちの姿を見てほしい。

昨年12月末、私は念願の内定を頂いた。今春からはホテルニューツルタの営業として働くことになる。1年間続いた就職活動は、確実に私の成長へと繋がった。様々な企業と会うことで見聞を深め、自分自身を高めることができた。

苦しい時に母から送られてきたメール。「その努力はきっと報われる」。自分を信じて活動してきた結果だった。この気持ちを忘れずに新しい未来へ突き進みたい。(中村早希)

◇「キラキラ光る」私になった

「疾風怒涛」。私のキャンパスライフは、この言葉がピッタリと当てはまる。いい思い出も悪い思い出もあるが、どれも私の財産だ。

「雑誌編集者」になるのが夢だった。芸短を選んだのは、実践的な活動ができる環境があったからだ。それが「キャンパスカフェ」だった。初めて取材したのは、音楽科の66歳の同級生だった。

「生き生きしている」。自分の祖父母と同じ位の年齢の人が、楽しそうに音楽のことを話す姿がうらやましかった。「私も何か目を輝かせて語れるものを作りたい」。その気持ちが、今の私につながった。

全ての土台になったのが「日韓次世代交流映画祭」だ。1年生ながら「学生管理」の責任者になった。ゲストのスケジュール管理から学生スタッフへの指示出しまで、さまざまな仕事をこなした。夜中3時まで作業をして、朝8時に登校するという日もあった。

その分、やり遂げた時の達成感は大きかった。お客様にも「ありがとう」と言ってもらえた。素直にうれしかった。目をキラキラさせて語れるものができた。

そしてもう一つが、この「Voice特別号」だ。念願の編集者デビュー作である。ここに至るまでたくさんの壁にぶつかり、なんとか這い上がってきた。

「キミみたいな子は珍しいよ」。何かあるたびに下川教授は口にする。褒め言葉だ。マルチにこなせる力を2年間で養った。そして、謙虚であることの大切さを学んだ。

私は今春から、株式会社「えがお」の社員となる。健康食品の通信販売が主体だ。「雑誌編集者」には程遠い。しかし、これは昨年11月に亡くなった父が招いてくれた「縁」だと思う。広報担当が目標だ。一人でも多くの人を健康で幸せにしたい。謙虚に素直に、そして笑顔で生きていこう。(赤池すずか)

Voice

ヴォイス

大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞

〒870-0833 大分市上野丘東1番11号 大分県立芸術文化短期大学

tel.097-545-0542(代表)/fax.097-545-0543

編集/赤池すずか、中村早希、森本絵美莉 2011年2月発行

平成22年度 サービスラーニング活動内容

〈前期〉

- あしなが学生募金 ■アースデイ ■上野の森の会 ■園芸サークル ■おおいた親子劇場
- 大分たなばた祭 ■キャンドルナイト ■キャンパスカフェ ■竹田食育ツーリズム
- 鶴崎 SAEMON23 ■福祉施設ボランティア ■府内学生 ECO フェスタ ■湯布院映画祭

〈後期〉

- あしなが学生募金 ■あしながPウォーク10 ■上野の森アートフェスティバル
- 上野の森の会 ■園芸サークル ■キャンドルナイト ■キャンパスカフェ
- 日韓短編映画祭 ■スタジアムクリーン研究会 ■国際車イスマラソン
- 芸短竹田交流活動